

3課（使徒15章）に入る前に、まず、使徒の働き1章からの流れを簡単に見てみましょう。

使徒1章には、イエス様が教えられた契約があります。キリスト、神の国、聖霊の満たし。

この契約を握って祈りました。そして、聖霊が臨まれることを期待して待ち望んでいました。そのとき、

使徒2章、「五旬節の日になって」ひとりひとりの上に聖霊が臨れます。

使徒3章から福音運動が始まります。初代教会が始まり、伝道運動、福音運動が始まりました。

使徒3章から6章までは、エルサレムを中心とした伝道運動です。

使徒7章で、ステパノの殉教によって聖徒たちが散らされ、その中で

使徒8章で、ピリポを通してサマリヤ、また、エチオピアの女王カンダケの宦官（高官）、つまり、異邦人も福音が伝えられます。

そのように1章に与えられた契約どおりの伝道運動が流れているのを見ることができます。

使徒9章には、サウロという青年が、復活されたイエス様の声を聞いて、神様の前に立ち返ります。

使徒10章には、異邦人のコルネリオが、福音の前に来ます。

使徒11章から、アンテオケ教会を中心とした伝道運動が始まります。

そこから使徒13章になって、宣教師たちが選ばれて派遣されます。

使徒13章以降からは、異邦人に向けた伝道運動が本格的に始まります。

その中で使徒14章を見ると、いろいろな迫害や問題も起こります。

神様のご計画は、必ず成就されることが1章から14章までの流れです。

イエス様がこの世に来られたとき、だれも自らイエスをメシヤ（キリスト）として信じる人はいませんでした。むしろ、イエス様の福音のみことばを拒否して、さらに十字架にかけて殺してしまいます。弟子たちさえも、十字架の現場から逃げます。福音が伝えられる現場には、常に迫害も伴います。

その内容を使徒14:22で、パウロがこのように告白します。

使徒14:22

弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない」と言った。

パウロは、14章で石打ちにされます。そして、死んだと思った人たちが町の外に引きずり出しました。しかし、神様がよみがえらせてくださいました。そして、再びイコニオムという町にに入って、弟子たちの出会いやいろいろなことがありました。そのような経験をしたパウロが「神の国に入るには、多くの苦しみも伴います」という告白をしたのです。

しかし、どんな患難、迫害、問題や事件が起こっても、神様は神様の熱心でご自分のみこころを成し遂げられます。また、恵みによって救われる残された者がいることを私たちにあきらかに示してくださるのです。

その内容が、15節11節、16-18の内容です。

使徒15:11

私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たち（異邦人）もそうなのです。」

使徒15:16-18

18 この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廢墟と化した幕屋を建て直し、それを元どおりにする。

17 それは、残った人々、すなわち、わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、主を求めるようになるためである。
18 大音からこれらのこととを知らせておられる主が、こう言われる。』

これは、ヤコブが旧約聖書の内容を引用して告白したことで、「神様は恵みよって、いまも残された人々を救われる」という神様のみこころを伝えました。

この背景は、使徒15:1を見ると

さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。

このようなことがあったからです。異邦人の中で、ユダヤ人や信じた人々が、このような間違ったことにだまされてしまったのです。パウロが伝えた福音以外の、まちがった他の福音に、人々が従って行くのを見て、もう一度、その人々が心強く信仰にかたく立つようにと願って、パウロはもう一度、その人々のところに行こうとしました。

そのことによって、パウロとバルナバ、まちがった教えをしている人々の中に、争いと弁論が起こりました。
それが第2課の内容です。

今日は、3課の内容を通して、パウロとバルナバの反目について見てみましょう。
(「反目」という言葉は、一般的には「互いににらみ合いの状態にあること」という意味ですが、ここではパウロとバルナバの「意見が対立したこと」です)

3課 パウロとバルナバの反目 (使徒15:36-41)

ポイント 「間違えない神様」



使徒15:36

幾日かたって後、パウロはバルナバにこう言った。「先に主のことばを伝えたすべての町々の兄弟たちのところに、またたずねて行って、どうしているか見て来ようではありませんか。」

うえにまとめたような(パウロが伝えた福音以外の教えをする人が出てきた)ことがあったので、パウロはもう一度、行こうとしたのです。

36節までがパウロの第一次伝道旅行で、36節以降が第二次伝道旅行が始まります。

しかし、パウロとバルナバの間で反目が起こりました。どんな内容だったのでしょうか。
一次伝道旅行でいっしょに同行して、途中で帰ったマルコと呼ばれるヨハネを第二次伝道旅行に連れて行くか、行かないかで、激しい反目をしたのでした。

37-41節まで見ましょう。

37 ところが、バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネもいっしょに連れて行くつもりであった。

38 しかしパウロは、パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょ

に連れて行かないほうがよいと考えた。

39 そして激しい反目となり、その結果、互いに別行動をとることになって、バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行った。

40 パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。

41 そして、シリヤおよびキリキヤを通り、諸教会を力づけた。

これを見てどのように思いますか。

私たちがここで、よく考えるべきことは、「だれが正しくて、だれがまちがっている」ということではありません。「だれかは福音化になっていて、だれかはまだ福音ではない」とか「だれかは神様の時刻表になっていて、だれかはまだ時刻表ではない」という考えをすることがあるでしょう。しかし、これらのことは自己中心的な人間中心主義（人本主義）と、律法主義の考えです。



私たちが36-41節のパウロとバルナバの反目を見て、それを通して見るべきことは、神様がなぜこのようなできごとを与えたのか。そのような事件を通して、なにをなさろうとするのかを見なければなりません。

人はだれでも間違えることがあります。しかし、神様には間違えはありません。

パウロとバルナバは、神様が選んで遣わされた者たちです。マルコの状態がどうであるか、第一次伝道旅行のときに間違えたかもしれません。それをパウロから見て、足りないと思ったかもしれません。しかし、マルコも神様が選ばれたイエス様の弟子であり、4福音書（マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）の中で、いちばん最初に書かれたマルコの福音書を記録することに用いられた者です。結局、後には、パウロがローマで福音運動をするとき、マルコが心強い助力者としていっしょに遣わされます。

今年が始まりましたが、どんな問題と事件の中でも、まず、キリスト、神の国、聖霊充満の契約を握って、25答えでともにおられる神様のみこころだけが、私たちを通して成し遂げられますようにという祈りから始めましょう。すべては、神様の計画で流れています。

みんなさんが、毎日、キリスト、神の国、聖霊の満たしを祈り、黙想する中にいるなら、今年一年も必ず私たちを遣わして、日本や世界福音化の神様のみこころを、神様がなさると信じます。

第3課のフォーラムの内容は「間違えない神様」です。みなさんは、間違えることがあってもだいじょうぶです。すべてを通して神様が、神様のみこころを成し遂げてくださいます。

